

卒業論文の要旨

論文題目	J・A・グリムショーの月明かりと街明かりの絵画についての研究—絵画の意義と意味を探る
氏名	佐々木 妃来
メジャー	哲学
<p>ジョン・アトキンソン・グリムショーは19世紀イギリスの画家である。彼の絵画はラファエル前派や象徴主義のような印象をうけ、荒々しくも繊細な自然の描写と夜の暗闇の中で輝く奇妙で且つ暖かな印象を帯びた月明かりと街明かりの描写が特徴的だ。同じくイギリスの画家であるジェームズ・アボット・マクニール・ホイッスラー(1834-1903)はグリムショーの絵画を見て「グリムショーの月明かりを見るまでは、自分が夜想曲を発明したと思っていた。」という言葉を残しているのはグリムショーの有名な話だ。そのような魅力を持つグリムショーの絵は19世紀のヨーロッパやヴィクトリア朝特有の風潮や雰囲気を見頃を感じさせる。一見、何の捉えどころもなさそうに見える絵画であるが、そこにはガス灯の灯りが作り出す産業化の進むイギリスの都市の環境問題や社会問題を起こすほどの「不快さ」と夜の都市を劇的に煌びやかにさせたノスタルジックな「暖かさ」、満月の月明かりが照らす中世の名残と近代が作り出す夜の「恐ろしさ」と「美しさ」などの二面性があった。または作品が纏う少しの憂鬱さや奇妙さを含む雰囲気はヨーロッパで流行したロマン主義、薔薇十字、象徴主義、世紀末思想などの近代イズムとのつながりも感じ取れる。グリムショーの絵画にはその時代の要素が多く含まれていることがわかった。本論文ではこのような絵画の中に潜んでいる物事の意味と意義を同時代または近い時代の画家の作品や当時の歴史や出来事を探究し研究を行なった。</p>	

(指導教員の推薦のコメント)

J.A.グリムショーについての日本語資料が少なかったため、図書館のご協力により、英語文献を取り寄せて、それを使って深く読解することができました。19世紀後半の「先進国」イギリスの「闇に覆われた夜の雰囲気」を深く把握しており、それをうまくまとめて、よくわかる素晴らしい内容となっていると思います。この卒論研究で経験した頑張りを、今後も生かしてもらいたいと願っています。(嶋田律之)